

春節特別企画

～1980年代の中国を語る座談会～

中国の2010年のGDPは、ついに日本を抜いて世界第2位となりました。当協議会が発足したのは26年前の1985年ですが、その当時から考えると現在の中国の経済発展は想像もつかない現実です。

当協議会並びに会員企業の皆様は、今後さらに発展を続ける中国との関係を築いていくわけですが、新たな日中建協を目指す私たちにとって、一度当時の中国を振り返ってみるのも、もしかしたら何かの役に立つかもしれません。

その様なわけで、2011年の春節に1980年代の中国を語る座談会を企画しました。

座談会参加者

佐々木潤二（株式会社STV-Japan）：2010年7月「講演会」講師

大学時代に第2外国語として中国語を学ぶ。28歳で退職し、1984年に北京民族学院に1年間の語学留学をした。

成田理恵（森ビル株式会社）：

大学時代に東洋史を専攻し第2外国語で中国語を学んだ。1986年にバックパックを背負って約40日間中国を旅行した。

藤井真紀子（株式会社遊茶）：2010年11月「中国に親しむ会」講師

1985年から89年まで銀行員駐在員の家族として北京に滞在。1996年に再度北京に戻ってくることとなった。

堀内恵美子（日中建築住宅産業協議会）：

初めて中国に行ったのは1976年。80年代に入ってから、青島、南京、西安、長春等々数多くの都市を訪問。

司会：事務局

参加者のプロフィールの詳細は会報誌「日中建築住宅情報」No.190 2・3月号を参照下さい。

当時の中国の印象

当時はまだ外国人が珍しかったと思いますが、中国の人たちは非常に人なつっこくて、街を歩いてもよく話しかけられました。70歳くらいのおじいさんに「日本には泥棒はいるか？」と聞かれたので、「いますよ。」と答えたところ、そんなことを言っていないのかというふうに驚かれました。国の恥になることは言っはいけないという雰囲気がありました。

中国には泥棒はいないと聞いていたのが、広州で満員のバスに乗っていたところ3人グループのスリに遭う寸前でした。幸いに被害はなかったのですが、泥棒はいないと聞いていた分ショックで、広州の印象はあまり良くありません。習った中国語が通じないというのもその要因かも知れませんが。

でも、みんな時にはお節介だと感じるくらいに大変親切でした。日本人の奥さんが赤ちゃんを抱いていて薄着だったり裸足だったりすると、全然知らない人たちが寄ってきて、靴下は穿かせなければいけないなどと言って怒られたりしました。

中国に初めて着いたときはとにかく暗いと感じました。1年経って留学を終えて日本に帰ったときは、

街がなんと輝いて見えたことか。日本は無駄の文化かも知れないと思いました。中国はこれから無駄をしていくのかも知れないですが、日本も経験してきた何十年か前の時代がそこには確かにあった。親の世代の時代をそこで体験できたというのが最初の印象です。

中国の最初の印象はとにかくうるさいという事。車の警笛がひっきりなしに鳴っていました。最初に飛行機を降りたときに、何となく中国の匂いというのを感じました。

食事・食べ物

私も中国の匂いを感じたのですが、それは多分香辛料の八角の匂いだと思います。中国は料理にいろんな香辛料を入れますが、私は八角がダメで料理のうち半分くらいはその匂いで食べられませんでした。

食事の思い出としては、包子（パオズ）を頼むときに、1斤や半斤という単位で言うので量が分からないまま注文したところ、蒸籠が8段重ねで出てきたことがありました。

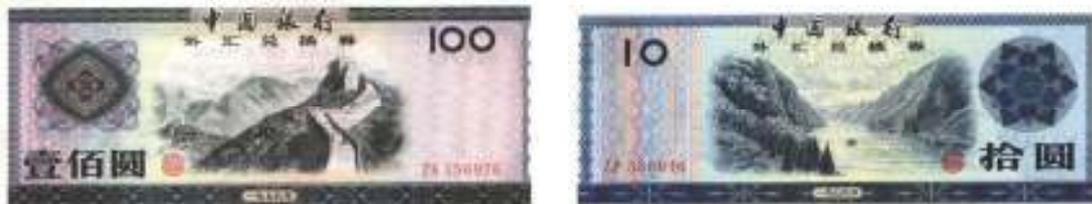
北京で初めて冬を迎えたときに、街の道端や家の軒先など至る所に白菜が積まれていて、冬中その白菜を使って料理するというような状況でした。冬の期間は白菜しかないのですが、それさえあれば冬は凌げるということなのです。

夏は哈密瓜（ハミウリ）が美味しかったです。ただ、1個単位でしか売っていないので1人旅行をしていたときに1個全部食べるのには多すぎて困りました。

美味しかったものは、刷羊肉（羊のしゃぶしゃぶ）。日本からポン酢を持って行ってポン酢で食べていました。上海から南京に行く途中の嘉定という街の粽や天津の「狗不理」の包子も美味しかったです。

当時は、外の食堂で食事をするときは値段が二つあって、糧票（リャンピアオ）という配給券を持っている場合とそうでない場合で値段が違いました。私たちの場合はその前にお金が発換券でしたので、田舎に行くとそのお金を信用してもらえず買えないという状況もありました。

今も人民元はあまりきれいなお札がないのですが、あの当時のお金は随分ボロボロでした。中国の方はあまりお財布を使わなくて、ポケットに入れるからでしょうか。兌換券に100元札はありましたが、人民元にはなくて50元札が一番高額な紙幣でした。あの当時の人民元は図案がいまとは違います。



トイレ

トイレには網のカゴが置いてあってそこに紙を入れました。便座は木製で、割れてひびが入っているものもありました。溝式が多かったです。田舎に行くと隣に豚がいるというような所もあります。

あの頃はオープンでした。隣の人と並んでましたから。溝式でみんなが通路に向けて隣と並ぶのですが、それぞれの横に衝立があるトイレを你好（ニーハオ）トイレと呼んでいました。通路を通るときに1人1人と目が合うので思わず你好！と挨拶をしてしまうのです。横の衝立がない場合は、みんなに一度に挨拶をすることになるので你们好（ニーメンハオ）、皆さんこんにちはトイレと言って、もっとすごいのは、トイレとしての建物がなくて野天のトイレの場合、天气怎么样（ティエンチ・ゼンマヤン）、お天気どうですか？トイレと言ってました。

この後も、話は買い物やお土産、街で見かけたスローガンやホテルでの出来事。そして、当時の中国での楽しみや電車での旅など話題は尽きませんでした。

この座談会の詳細は、会報誌「日中建築住宅情報」No.190 2・3月号に掲載しています。